和田傳が描いた満洲分村移民
―小説『大日向村』を中心に―

高　燕文

総合研究大学院大学　文化科学研究科　国際日本研究専攻

要　旨

戦時下、農民文学懇話会（1938年11月発足）や大陸開拓文芸懇話会（1939年2月発足）という官民提携の文学団体が結成されたことにより、日本内地の多くの文学者たちによる積極的な満洲開拓地の視察・見学がなされた。彼らは、満洲農業移民の諸事情を題材として、大陸開拓文学と呼ばれる文学創作ブームを生み出し、満洲農業移民の宣伝及び記録の一役を担うこととなった。

その代表作の一つとして、農民文学作家の重鎮である和田傳の小説で、当時の大ベストセラーとなった『大日向村』が挙げられる。この作品においては、分村移民の模範村であった長野県・大日向村の分村移民が題材にとられている。戦時下の日本語文学における満蒙開拓に関する言説空間などの問題を考える時、この小説は無視できない役割を担っていると思われる。だが、これまでの研究の多くは『大日向村』の国策宣伝小説というような位置づけへの関心に偏りすぎていて、作中の人物像、分村移民の宣伝・動員のストーリー、満洲イメージなどの具体的な作品内容に関する分析が足りない。本稿では、『大日向村』という小説に注目し、主に作品のテキスト分析を中心として、満洲農業移民に関わる社会学、歴史学などの研究成果を取り入れながら、この作品から作家が描いた満洲分村移民の諸相の抽出・提示を試みる。

まず第1章で小説『大日向村』が出版された後の影響を指摘し、この小説に関する先行研究の問題点を提起し、本稿の問題意識と研究動機を説明する。続く第2章では、『大日向村』の創作背景を解明する。当時の和田傳の恐慌下の農村への関心、朝日新聞社の友人からの要請、農相・有馬頼寧との接近、農民文学懇話会への参加、日本内地と満洲の二つの大日向村への調査などの事実を指摘し、『大日向村』の成立までの経緯を追跡する。その後第3章では具体的な作品分析を展開する。主に、作品中に宣伝された分村移民の論理、登場した各層の人物、嵌め込まれた満洲イメージ、文学表象と歴史現実との対照という四方面から、この小説に反映された満洲分村移民の実像と虚像を考察する。最終章では、まとめとして、前述した分析に基づき、この小説の「国策宣伝」と「国策記録」の両方面の性格を論じる。議論を通じてこの小説が国策順応の開拓文学作品としての一面だけではなく、農民文学の代表作として、再評価されるべきだと主張する。

キーワード：和田傳、『大日向村』、分村移民、満洲、文学表象、国策、農民文学

1. はじめに
2. 『大日向村』の成立までの経緯
3. 『大日向村』の作品世界
3.1　語られた分村移民の論理：母村更生と植民地経営
3.1.1　母村更生のために
3.1.2　満洲進出・植民地経営の助力
3.2　登場人物：分村移民の流れに現れた人間模様
3.2.1　村の指導層の役割
3.2.2　下層女性の姿
3.3　移民の「理想郷」：イメージ化された満洲
3.3.1「理想的な新天地」としての満洲イメージ
3.3.2「心情的故郷」としての満洲イメージ
3.4　文学表象と歴史現実
4. おわりに

1. はじめに

周知のように、「満洲農業移民」[1] に関する研究について、現在まで多くの蓄積がある。だが、その多くは政治史、経済史、社会史、地域史の視角からのものであり、満洲農業移民が当時の作家によって、どのように認識され、表象されていたか、という文学創作の視角からの研究は十分になされてはいない。文学は歴史記憶を記録する媒体としての機能をもつ。大陸開拓文学[2] というジャンルの作品群は、満洲農業移民政策の推移、移民の送出過程、移民たちの横顔、移民たちの生活空間（入植地の自然・社会環境）及び具体的な移民団体等の多方面の題材にわたり、移民、視察者などの「小さな声」を拾い上げた。その中の代表作は当時のベストセラーとして広く読まれ、多かれ少なかれ戦時下の日本人の満洲・満洲農業移民に対するイメージの形成に影響を与えた。時代の空気を色濃く反映する一表現としての文学の役割を考えると、この視点からの検討は重要だと考える。本稿は、数多くの大陸開拓文学作品の中でも特に広く知られた和田傳の代表作『大日向村』（朝日新聞社、1939年）を取り上げ、そこに描かれた満洲分村移民[3] の宣伝・動員・送出の諸相を検討したいと思う。

和田傳の『大日向村』においては、分村移民の模範村であった長野県大日向村の単村式分村移民[4] が題材にとられている。この作品は初版から、一年の間に、版を重ね[5]、当時の大ベストセラーとなった。それに留まらず、出版後この小説は劇作、映画、放送劇、紙芝居にも改編され、これらが日本全国に宣伝されることにより、分村・分郷移民[6] に対する社会的関心をさらに高めた。そして、大日向村は財政破綻寸前の一寒村から一転、全国から注目を浴びる存在になった。各地からの視察者が相次いで長野県の大日向村を訪問した。満洲大日向村についても、島木健作の『満洲紀行』（創元社、1940年）、望月百合子の『大陸に生きる』（大和書店、1941年）などの大陸開拓文学作品に登場することから分かるように、多くの視察者を迎えている。一言で言えば、大日向村は長野県の一寒村から「天下の大日向」になったのであり、戦後、天皇の巡幸・訪問地にもなった。このようなイメージの転化のプロセスには、小説『大日向村』が決定的な役割を果した。昭和恐慌下の日本農村の疲弊、移民の一形式としての分村移民の動員過程、移民たちの心理葛藤及び戦時下の日本語文学における満蒙開拓に関する言説空間などの問題を考える時、この小説は無視できない役割を担っていると思われる。よって、本稿は『大日向村』を研究対象に選定した。

長野県は、最大多数の満洲農業移民を送出した県であり、戦後の満洲農業移民研究において、

県内の移民送出の村はしばしば重要な事例として検討されてきた。単村式分村で注目を集めた大日向村もその一例だ。戦後、大陸開拓文学作品群の多くが忘れ去られていったにもかかわらず、前述した出版当時の人気も手伝い、『大日向村』についての研究には一定の蓄積[7]がある。しかしながら、先行研究におけるこの小説あるいは作家・和田傳に対する評価には、批判的なものが多い。「大陸移民を基本的に推進する力となった中国への帝国主義的軍事侵略に、加担している自己を自覚できない、いわば時代状況に埋没してしまっていた」[8]、「実名小説ではあるがけっして実態ではなく、また何らかの事実関係の反映もない駄作」[9]、「農民文学が国策を担う趨勢、言わば、農民文学そのものが時代への阿りを持ち、そのことが、この一農民文学作家を通じ（中略）、はしなくも露呈している」[10]、「『大日向村』は分村移民を「翼賛」するために書かれた国策小説である。この作品の政治性が国策的要求に呼応するものであり、それゆえ作品が国策的要求の文学的形象化にとどまったという評価は正しいといえる」[11]などの評論が挙げられる。

これまでの多くの『大日向村』研究は作品の国策文学・時局便乗小説としての政治性に関する検討に偏りすぎている。確かに、この小説の内容が満洲農業移民という国策を宣伝していることは否定できない事実である。作者は作品の中で当時の国策に対して批判的な書き方をしていない。これは後述する作者の創作動機から見れば当然のことである。だが、先行研究には、作品の中に国策としての分村移民がどのように描かれたか、どこまでがフィクションでどこまでが歴史現実に関する反映か、この作品の文学性をどう評価するかなどの問題に関する考察は足りない。この小説には様々な階層の人物が登場し、時代の空気が色濃く反映されており、戦時下の日本農村の実況及び分村移民の現実がある程度記録されているという一面が見過ごされがちである。だから、作中の人物像、分村移民の宣伝・動員のストーリー、嵌め込まれた満洲イメージなどに関する具体的な分析を踏まえ、検討する必要が多分にあるだろう。換言すれば、この小説を単なる国策順応の開拓文学作品ではなく、戦時下の農民文学の代表作として再評価する必要がある。なぜならば、満洲農業移民という国策に順応したことも戦時下の農民文学がとりあげた題材としては見落せないからである。

このような問題意識に基づき、本稿では、まず、戦時下の和田傳の活躍に注目し、和田の「大陸開拓文学」の作品群を整理した上で、新たな資料を用いながら、小説『大日向村』の執筆までの経緯を辿り、その創作動機を解明する。その次に、作品論という視角から小説の具体的なテキスト分析をおこない、今まで見逃されてきたストーリー・登場人物を掘り起こし、文学的表象と史実を対照させながら、作品中に描かれた満洲分村移民の諸相及び文学表現の可能性と限界を究明する。最後に、前述した分析に基づき、小説『大日向村』には現実中の満洲分村移民の諸相が一定程度描かれているということを示しつつ、この小説を戦時下の農民文学代表作としての一面を再評価したい。

2. 『大日向村』の成立までの経緯

1937年以後、ほぼ同一時期（1932年）から取り組まれでた農林省と拓務省の農山漁村経済更生運動と満洲農業移民の政策が本格的に結びついた。そして満洲農業移民は、その結びつきに基づいた分村・分郷移民計画という形で結実した。その分村・分郷計画が樹立された過程自体、大陸開拓文学の新たな素材となった。当時、先進分村・分郷を描いた小説としては、和田傳の『大日向村』、福田清人の『日輪兵舎』（朝日新聞社、1939年）、丸山義二の『庄内平野』（朝日新聞社、1940年）などが挙げられる。この三冊の作品は、それぞれ大日向型、南郷型[12]、庄内型[13]という三種類の分村・分郷移民の実例を描き[14]、1941

年に「開拓文学叢書」普及版として朝日新聞社によって再版された。中でも人気を集めたのが和田傳の『大日向村』である。本章では、当時の和田傳の恐慌下の農村への関心、朝日新聞社の友人からの要請、農相・有馬頼寧との接近、農民文学懇話会への参加、日本内地と満洲の二つの大日向村への調査などについて検討する。同時に戦時下の和田傳の満蒙開拓関係の作品年表を整理し、その文脈の中で『大日向村』の創作経緯を追跡する。

和田傳（1900 ～ 1985年）は、1923年、処女作となる短編「山の奥へ」（『早稲田文学』7号）を発表し、文壇にデビューした。その後、1924年に結成された農民文芸会に参加した。1937年11月、初めての書き下ろし長編小説『沃土』が砂子書房より刊行され、翌年1月に第1回の「新潮社文芸賞」が授与された[15]。地道な農民作家として歩んできた和田傳は長い間、昭和恐慌下の次男・三男問題、地主と小作との対立などの農村問題に注目していた。しかも、和田は家族を連れて、1932年から東京町田町より生家へ帰って、農耕・養鶏のかたわら創作に打ち込む生活を送っていた。このような生活経歴から見れば、彼が当時の農村にとって重要な関心事となっていた満洲農業移民という新しい問題に着眼したのは自然な成り行きだったと言えよう。『大日向村』が創作される前に、彼の『沃土』、『風土』（教材社、1938年）、『生活の盃』（新潮社、1938年）などの作品中にも満洲に関わる人物が登場するため、「国内の農村不況の解決を大陸において果たすことの志向を作品中にさしはさんでいる」[16]という評価も受けている。

和田傳が最終的に大日向村の分村移民を小説の題材と決めた過程には、今までの先行研究ではあまり詳しく言及されていない大きな契機がある。一つは『アサヒグラフ』の知人・松崎不二男の要請である。1938年夏、和田が松崎の要請で、『アサヒグラフ』の取材[17]のために茨城県の内原訓練所を探訪した時、松崎から大日向村の分村計画の詳細を聞いた。内原訓練所を見学した後、和田は「（前略）私は内地農村のいろいろな問題を大陸との関聯なしには考へられぬことになってしまった。私は急目の先がひらけたやうに思ひ、大陸のことがそれから身にしみて切実に考へられた。日本海が埋ってしまひ、満洲はすでに陸つづきに考へられた」[18]というような感想を語った。引用文から分かるように、この時、和田傳にとって、満洲はもはや日本内地農村の運命と緊密に繋がっている地方、あるいは帝国日本の一部分と認識されるに至っていた。和田は『大日向村』の「後記」でも、この小説を執筆する経緯を回顧しつつ、「私はこの大日向の分村を主題に小説をかきたいと思ったが、一旦はこの計画を放棄した。まだまだ私の筆では手に負へないと思はれたからである。するうち松崎君が、うちで本にしたいから書け、何でも彼でも書けと、すすめたりおだてあげたりするので、私もたうとうかく気持ちになった」[19]と述べ、松崎不二男からの要請があったことに言及している。

もう一つは、和田と当時の農相・有馬頼寧との接近である。当時の和田の随筆[20]によると、有馬農相が1938年初夏の第33回全国産業組合大会の講演の中で和田の小説『沃土』を引用し、「わたしが大学（東大農学部）で学んだ農村や農民に就いての知識よりも、この一編の小説から学んだもののほうがはるかに多かった」[21]というような高い評価を下したという。当時の同大会の参会者からそのことを聞いた後、和田は随筆の中で「政治当局者のその担当する分野の実体への認識が、統計の数字や下からの調査報告書などによるばかりでなく、最新刊の文芸作品までもそれに加へるといふことは、考へれば当然のことのやうでありながら、それほどのことをする政治家はこれまでなかったやうである。（中略）私たちの書くものが政治当局者によって読まれ、その認識や延いては為政に何等かの点で参考になることでもあれば、作家として悦ばし

い限りだ」[22] と述べている。自分の作品が当時の農相に目を掛けられたことは、農民文学作家としての和田傳にとって一種の誇りとなったのである。このことは戦時下における和田の大陸開拓文学創作と直接的に関わっている。

さて、1938年の10月13日、和田は長野県の大日向村を訪ねた。同月16日まで滞在し、村内を丹念にまわり、村長や産業組合長をはじめ組合主任、村会議員、小学校教員などの様々な人物から話を聞き、資料をもらったり筆写したりして調査を行った[23]。しかも、第二次家族招致隊が出発した16日には、村民らの「万歳の歓呼と別離の歔欷」の中、小諸駅まで同行した[24]。戦後の和田の自伝によると、（同年の秋）彼は有馬農相と会った際、大日向村の分村移民について多くのことを話した。その後、「少したって有馬秘書から、こんどは満州の大日向村の分村のほうも見てきたらどうか、ついでに北満の開拓団もあちこち見てきたらなおよいが、どうだろうとつたえてきた」[25]。これが和田が満洲の開拓地へ視察に行く契機になった。同年の11月、和田は、有馬農相が顧問を担当した半官半民の文学団体――農民文学懇話会の中心メンバー（のちに大陸開拓文芸懇話会にも参加した）となり、懇話会の発会式が行われた11月7日の夜、作家派遣の先頭兵として、満洲の開拓地を視察する目的を持って出発し、1ヶ月間北満の開拓地をまわり歩いた。この道中、和田が真先に足を向けたのが四家房地区の満洲大日向村である。11月13日の正午、彼は四家房駅に到着した。ここに3日ほど滞在した後、ほかのいくつかの日本人移民村を訪ね回った。この間の見聞及びこの後の個人取材に基づき、和田は以下のような大陸開拓文学作品群（表1[26]）を創作した。

表1に示したように、『大日向村』が上梓される前に、和田傳はすでに何篇もの見聞記を発表していたのである。ただし、長篇小説で満洲への分村移民問題を正面から扱ったのはこの『大日向村』が初めてである。のちに、和田は、小説『大日向村』の執筆動機について、以下のように回顧している。

> この大事業をさながらに描くには私の筆はまだ拙劣無力なのであるが、それを承知しながら面皮を厚く敢へてこの稿をなしたのは、この画期的な大事業の幾分をでも伝へることができたならといふ気持と、幾分をでもひろく伝へなければならぬのではないかといふ気持とからである。[27]

以上に述べたように、小説『大日向村』の創作の契機には、作者内部の関心、『アサヒグラフ』の知人の要請、農相・有馬頼寧との接近、農民文学懇話会への参加、母村の長野県大日向村への訪問と子村の満洲大日向村への視察などの多様な要素が関わっている。ある意味、この作品が創作される背景には一種の必然性があったともいえよう。「後記」で語られているように、大日向村の分村移民を世間に伝えることが作者の創作目的だった。それでは、「画期的」、「大事業」、「ひろく伝えなければならぬ」という言葉が示しているように、大日向型の分村計画に高い評価を下した和田傳は、『大日向村』ではどのようにこの分村移民を語ったのだろうか。

3. 『大日向村』の作品世界

3.1　語られた分村移民の論理：母村更生と植民地経営

3.1.1　母村更生のために

大日向村の経済構造を分析した数多くの先行研究[28] が示しているように、この山村はほとんどが山林原野で、耕地面積は村総面積の15％に過ぎない。地理的環境の制限のため、米を自給することは出来ず、他の多くの山村のように、繭や木炭、木材を販売して、米などの生活必要品を買うのが常態化していた。小説『大日向村』でも、作者は最初から大日向村の「疲弊した日陰山村」というイメージを強調することで、移

表 1

発表時間	作品名	掲載書誌名（巻号）	出版社・出典	注記事項
1938.9.9	建設面の文学	東京朝日新聞	東京朝日新聞社	
1938.9.20	内原義勇軍訓練所訪問記	『アサヒグラフ』臨時増刊号	東京朝日新聞社	
1938.11.27	槍騎兵　満洲だより	東京朝日新聞	東京朝日新聞社	
1938.12.6	満洲だより　大陸の花嫁	東京朝日新聞	東京朝日新聞社	
1938.12.7	大陸に肥立つ新日本農村満洲大日向村より	『アサヒグラフ』787号	東京朝日新聞社	
1938.12	大陸農村の動静	不明		雑誌切抜
1939.1.10	拓かれゆく移民地：黒咀子移民団ルポルタージュ	『文芸春秋』17（2）	文芸春秋社	
1939.2.1	北満移民地の冬	『セルパン』97	第一書房	
1939.3.31	若い地（土の文学叢書）		新潮社	作品集。収録された関連作品：「南五道崗信濃村」、「哈達河」、「黒咀子移民団訓練」、「一町三反」、「深い墓」
1939.6	大日向村		朝日新聞社	
1939.9	藁草履		金星堂	作品集。収録された関連作品：「満洲大日向村」、「北満開拓地の印象」、「大陸片信」、「北満冬近く」など
1939.10	殉難		金星堂	作品集。収録された関連作品：「殉難」
1939.11.22	原作者の語る事実・小説・芝居：大日向村の人々	『アサヒグラフ』837号	東京朝日新聞社	
1940.9	生活の畝		昭和書房	作品集。収録された関連作品：「北満二題」（豚舎の前、共同宿舎にて）
1942.7	草の蔭に		小学館	作品集。収録された関連作品：「伝説」、「哈達河の農婦」、「学生義勇軍の春季訓練を見る」、「学生義勇軍村に来る」、「農民文学の現実」など

民の必然性と必要性を説得的に示そうとした。

地理条件に恵まれない大日向村は昔から半日村と呼ばれる暗い日陰の村だと言われてきた。総戸数406戸で、耕地が少なく、「農家一戸あたりの耕作平均は田一反五畝、畑四反六畝、合せて六反一畝といふ驚くべき数字」[29] を示していたという。村民たちは年の三分の二の食糧を得るために山に入り、村有林もしくは、一人の豪家所有の山に入るかして炭を焼くのだ。半農半炭焼きの生活である。もう一つの生計を立てる方法は蚕の飼育だ。このような養蚕と炭焼きに収入の大半を頼る山村は、農耕経済の基盤が弱い。だが、大日向村は元々は、疲弊した山村ではなかった。かつての大日向村について、作者は以下のように描いている。

山蔭にかくれて世の華美浮薄を知らず、おそい太陽とともに山へ入り、はやい入陽とともに帰り、人々は鼓腹撃壌、生活をたのしんできたのであった。山襞に隠されて世の人の知らぬ武陵桃源の夢をたのしんでゐたのである。[30]

だが、昭和恐慌のため、この桃源境は破壊された。「きもをつぶすほどの繭価の暴落に会って生計の資にならなかった。一貫目十二、三円の繭は実にただの二円を割るまでに墜ちたのである。一俵一円四十銭であった木炭は、ただの四十銭といふ暴落の仕方であった」[31]。しかも、過伐に過伐を重ねた末、村の薪炭林が「皮をむかれたみたいに幼齢木ばかりになりはててゐる」[32]。そのほか、村では「総額四十万円余りの負債を、つまり全村四百六戸の一戸当り平均にして千円を超えた負債を抱へ込んで」[33] しまうことになった。このような状況の中で、村税の滞納も大きな問題になった。小説の中では、年の瀬に、村長・由井啓之進が滞納した税の督促のため村を回るシーンも描かれている。繭や木炭、木材の価格の暴落により困窮し、収入が大幅に減少した上、「村内の商業高利資本に搾取され莫大な負債を負わされる」[34] 悪循環に陥った貧しい農家には滞納した税金を支払う余力がなかったのである。その結果として、村長は、材木問屋である油屋の村野に、土木費の立て替えを厳しく催促されて辞職するに至った。

このように、作者は詳細な統計データを提示しながら、人口数量、耕地面積、負債状況などを含む大日向村の当時の概況を細かく描いた。加えて、以前の繁栄と対照させることで、耕地が少ない「半日村」で、米の自給ができず、繭価の大暴落と炭需要の低迷に直撃され、財政的に苦境に陥っていた崩壊寸前の一寒村というイメージを際立たせた。作者は、困窮に苦しむ大日向村の現状を、この村が昔の「武陵桃源の夢」を再現するべく分村移民を目指す伏線にしている。換言すれば、昭和恐慌の影響で「人多地少」の矛盾が露呈してきた母村の更生の夢を、「沃土万里」・「王道楽土」と宣伝されている「理想郷」としての満洲の大地に賭けるというストーリーを自然に作品中に成立させたのである。当時の官庁資料「大日向分村計画の解説」[35]、『新農村の建設：大陸への分村大移動』及び戦後の研究報告集『日本帝国主義下の日朝中民衆：長野県南佐久郡大日向村（現佐久町）満州分村移民研究報告第二集』[36] の中に掲載された当時の大日向村の人口数、耕地・林地面積、米価・繭価、消費関係と負債状況に関する調査報告によると、和田が作中に挙げた統計データはそれらの資料に掲載されたデータとほぼ一致する。そこから分村当時の大日向村の実態の一面が垣間見えるのはこの小説がルポルタージュ風の農民文学作品として評価し得る一つの点である。

前述したように、分村移民という政策は日本内地農村にとって、可耕地面積と人口数を調査した上で、いわゆる適正規模論に基づき、過剰人口の送出に力点を置き、農村の再編成を図った政策である。作者が浮彫りにしたこの「人多地少」の貧困山村というイメージは過剰人口を排除し母村の更生を目指すという当時宣伝された分村移民の論理に明らかに合致する。

3.1.2　満洲進出・植民地経営の助力

適正規模論に基く母村更生という論理の他に、もう一つの分村移民送出の論理も作品中には示されている。それは国家的意味から日本の満洲進出・植民地経営を助けるということである。満洲農業移民事業には異なる要請に基づいた経済政策的側面と大陸政策的側面という二つの性格があったのは周知の事実である[37]。特に、満洲農業移民政策は、1936年に日本の「七大国策」の一つとして位置づけられ、さらにその後、農山漁村経済更生運動と結びつき、大量移民期に入った。この大量移民期の主な移民形式としての分村・分郷移民の実施は、内地農村を更生さ

せると同時に、帝国日本の満洲経営の助力という役割も明らかに担っていた。この段階のモデルケースだった大日向村の分村移民を題材とするこの小説が、当時のこうした政策の影響を大きく受けているのも当然のことである。

この点については、作品中の分村移民の動員過程における大日向村幹部たちの言動から窺える。その例として、移民動員の村常会に村会議員・学務委員の小須田兵庫と小学校教員・首席訓導の中沢勇三の発言が挙げられる。

長野地区は、信濃国と呼ばれていた時代から、故郷を離れ、出稼ぎに出る者が非常に多かった。その中には、江戸へ出て「米搗」[38] をやる者が特に多かった。「当時江戸では、米搗は「信濃」と呼ばれ、或は「おしな」または「おしなっぽう、」ひどいのになると「信濃介、」または「浅間左衛門」などといふ名で」[39] 呼ばれ、信濃者の「大飯喰らい」[40] が軽蔑されていた。小須田兵庫はこの歴史に触れつつ、村民に向けて以下のように語る。

> 「――諸君はおなかを抱へて笑ひやすが、昔のことだからかうして笑へるので、これがわれわれ信濃人の祖先たちが受けた屈辱なんでありやす。われわれは今日、現代のわれわれ信濃人はこんな屈辱に堪へることはできないのだ。満洲移民は、こんな出稼ぎに行くんではないのでありやす。大陸開拓の第一線に立ち、島国日本から大陸日本に飛躍する大使命の最前線を行く挺身隊なのでありやす。東海の孤島日本を、大陸の盟主たる大陸日本に発展せしめる大使命を今日の浅間左衛門は背負ってゐるのでありやす。」[41]（下線部筆者）

その後、中沢勇三は百姓たちが最も関心を寄せる食生活と関連づけて以下のように小須田の発言を援護する。

> 「（前略）わが国は古来より豊葦原の瑞穂の国だ。諸君、われわれはもう雑穀食ひはやめにしようぢゃないか！われわれは生一本の米の飯ばかり食ふことにしようぢゃないか！それでこそ、瑞穂の国の国民なのだ。瑞穂の国の人民らしく、米の飯を食はう！諸君、大陸の沃野がわれわれを待ってゐるんだ！」[42]（下線部筆者）

以上のように、昔から信濃地方の人々が生計のために、故郷を離れて、稼ぎに行くのは普通のことだった。だが、作品中のこの二人の村幹部たちは、満洲分村移民は生計を立てるため出稼ぎに行くのであり、「大飯喰らい」と軽蔑されるようなものとは違うという意識を持っている。つまり、「大陸の開拓の第一線に立ち、島国日本から大陸へ飛躍する大使命の最前線を行く挺身隊」としての国家的献身という意味づけをしていたのである。ここには、「信濃介」や「浅間左衛門」と呼ばれた「恥」の出稼ぎから日本の飛躍への助力という「栄光」の移民という転換がある。祖先たちが受けた屈辱を晴らすのに加え、「瑞穂の国」の国民としてのプライドも意識されていたと思われる。ここから作者・和田が村民が母村更生のために移民するというイメージを弱め、国家のために移民を送出するという意義を強調しようとしている意図が見える。

また、和田は植民地経営における移民の重要性をもう一人――更生委員会の水原藤三郎の心理描写を通して再度強調した。日中全面戦争勃発後の8月中旬、召集令状は大日向村にも来ることにいたった。多くの若者が徴兵されてしまったことで、村人たちの移民への意欲は減退し、分村事業は重大な危機に直面した。この状況について、水原の考えは、以下のように記述されている。

> 戦争とともに、満洲への分村の事業もまた国策戦の一翼であるといふ判断を彼ははっ

きりとつけてゐたのである。南方のその戦線とともに、この北方の鋤耕線の方も、国策の片棒をかつぐ戦争であると彼は信じた。そして、人々のただまっしぐらに南の戦線にのみ向ふ関心を北へもまた向けなければならぬと信じ、その実践のために死力をつくさねばならぬと思った。
（前略）人々は戦争のことばかりを口にし、満洲のことを言はなくなったのである。移民に最も適当な青壮年層から多数の応召者を送り出し、それは今後も益々つゞくことと予想され、人口の過剰は、いきなり緩和されることになったのだ。はやくも働き手を失った耕地は移動しはじめ、耕地のない者はそれに勇躍飛びついて行くといふ現象があらはれ出してゐた。そして、勇躍飛びついて行く時期が過ぎたらどうなるのであらうか。もしか耕地の方が余ってしまふやうなことになったらどうなるのであらうか。そしたらどうなる？はるばる満洲へなぞは行き手がなくなるのではないか。藤三郎はそのことを考へてせつない思ひを深めるのであった。[43]（下線部筆者）

この考えの背景には、日中全面戦争の勃発による日本内地の情勢や農村事情の変化のため、「移民消極論」が再び台頭したという時代的風潮がある。この時期、繭価の回復による村の経済状況の好転、軍需景気のもたらした鉱山再開、戦争遂行の徴兵により労働力の流失などのために、「過剰人口」が緩和された。そのため、農村経済の活性化のために満洲への移民を行う必要が徐々に解消されていった。当時の満蒙開拓青少年義勇軍訓練所所長・加藤完治は、「移民消極論」の再台頭に対し、1939年1月、東京で行われた「先進分村に聴く」という座談会で、以下のような発言をしている。

事変が勃発したから、成るべく満洲移民は縮めたほうがいいというやうな空気が生れて来た。しかし私共はこれと全く反対で事変が起きたからこそ益々早く満洲を固めていかなければ駄目だと思ひます。[44]

作品中に描写される一介の小作人である水原藤三郎の考えは明らかに加藤の発言と同じ論理に基いている。いや、むしろ、水原の口を借りて、作者が加藤の考え方にシンパシーを感じたことを示し、自身の満洲及び満洲農業移民に対する認識を表明したと言ったほうがいいだろう。加藤の発言は満蒙開拓青少年義勇軍送出の発想へとつながっている。作品中で、村幹部たちは、移民に対する村人の消極的態度に危機意識をもち、小学校で移民動員大会を開催した。県知事一行、農林省の経済更生部長、農村更生協会・満洲移住協会からの講師たちなどがきて、「満洲移住の歴史的、民族的意味や使命、内地農村の更生立場からの分村の意義」[45] など、多方面から満洲分村移民の重要性と必要性を村民に教え込んだのである。

分村移民の帝国経営上の意義に関する作者の関心を窺う上でもう一つ注意すべき点がある。それは作品中にも後記にも作者が大日向村の理想的な単村式分村形式について高く評価し、その独創性を何度も強調しているところである。その独創性とは、具体的に言えば、「渡満人数を揃へるためには、ただ頭数だけを揃へるといふのでなしに、あくまで母村再建、子村建設の大目標のためにはその員数を、あらゆる資産的、頭脳的、または年齢的階層からすぐって選び出さなければならなかった」[46] ということである。換言すれば、母村の更生のため、過剰人口を送出することだけでなく、満洲における子村建設のことも考慮に入れ、資産的・頭脳的・年齢的にあらゆる階層を網羅し、均質的で周到な分村をするということである。満洲における移民村の建設が直接的に帝国日本の大陸開拓と繋がっているのは言うまでもない。

だから、頻繁にテキストの中で慎重に移住者を選択し満洲の移民村の建設を重視する必要性を強調した作者の態度から、満洲農業移民事業が担っていた国家的使命に寄せた彼の関心が分かる。そのほか、小林信介の考証によると、当時の『大日向村報』[47] 第2号に掲載された論稿のなかで、浅川村長は「満州分村建設が「村民生活の安定」、「より良き村の実現」、「国策遂行」という「一石三鳥の御奉公をなし得る」」[48] という認識を示していた。村の指導層のこのような認識が明らかに和田が作中に提示した分村の論理と合致した。これまでの研究の中には、作中の窮民救済・母村更生から国策遂行へ移行する分村論理の語りを作家の創作上の破綻と視されているが[49]、上述した歴史事実を照らし合わせてみれば、作中に語られた母村更生と植民地経営という分村論理の並行が当時の農村における移民宣伝・動員上の実態であると言えよう。

3.2　登場人物：分村移民の流れに現れた人間模様

3.2.1　村の指導層の役割

大日向村の分村計画の立案・推進に焦点を当てるこの小説には、この計画に関与し活躍していた、ないしは巻き込まれていた村の各層の人間模様が生々しく描かれている。特に、村の前期の経済更生運動で養成された指導力を備える更生委員会のリーダーたちを代表とする村の中堅層及び彼らを媒介として、末端の農民まで浸透する国民統合・国策浸透システム[50] が構築され、大きな役割を果したことが明瞭に描かれている。例えば、前章で言及した小須田兵庫と中沢勇三の発言からもこの分村移民の動員実態の一面が垣間見える。両者とも実在の人物で、率先して移住者に志願し、満洲大日向村の建設に大きく貢献をした。ここでは、まず、分村移民計画の立案・推進に最も大事な役割を果したほかの二人の登場人物を紹介する。一人は村の産業組合の理事で後の開拓団団長になった堀川清躬で、もう一人は辞職した村長の代わりに、財政も村政も混迷していた大日向村に戻り、新たな村長になった浅川武麿である。この二人も実在の人物で、元々奉公人と主人の関係である。貧しい家の次男として生まれ、十分に教育を受けることなく、浅川のもとに奉公に出され、武麿の守りをさせられたことがある堀川清躬について、作者は以下のように描いている。

> 三十五年の間もその不屈な闘志にこそ清躬は生き甲斐を感じて来たやうな男だ。（中略）<u>堀川清躬が生き抜き闘ひ抜いて来た不屈な生命力は、その途方もなく高く聳えあがった障害のゆゑにこそ烈々と燃えさかって来たやうなものだ</u>。四斗樽のやうなその体躯も、五十五歳にして白髪一本生やすひまもないその若さも、（中略）もって生れた明敏な頭脳に一時も磨きをかけずにはゐられなかった鍛錬のはげしさも、<u>身を一介の炭焼人夫に起し、伝統と因襲の牢固としたなかでまるでひとりでにさうなったみたいに産業組合専務理事にまでせりあがってしまった異常な身分上の躍進</u>も、そのほかのすべて、こんにちの堀川清躬なるものを成生してゐるあらゆるものは、言ってしまへばこの高くけわしい障害ゆゑにこそつくられてしまったのだ。[51]（下線部筆者）

村の炭焼きの人々は、皆、村の地主で山持ちの油屋村野吉兵衛への仕送りで生計を維持している。不景気で、村民の油屋への借金が多く溜まった。この油屋の独占主義に対抗するため、村有林を焼く炭焼き人夫を組織化し、大日向産業組合を結成したのが堀川である。彼は炭焼きを得意とし、村民への指導にも熱心だった。不屈の闘志、熱情、能力によって、堀川は村民の尊敬と信任を得たのだ。そのような堀川の人柄は分村移民の動員過程において大きな役割を果たした。彼は村人の満洲に対する不安を解消す

るため、弁舌よりも実物を突きつける考えに基づき、率先して満洲へ行き、現地で蒐集してきた各移民団の土と農作物を村に持ち帰る。視察談を兼ねた移住者募集のための村常会でこれらを村人たちに見せ、多くの村人を動かし、移民者の募集を推進した。

戦後、大日向村の引揚者たちなどへの聞き書き調査[52]によると、なぜ満洲へ移住したかと聞かれた時、「清躬さんを信頼していたんですよ」、「自分が先頭に立って行ったんです。あの人が行くなら私も行きましょうということになり、やはり皆さんはついていったんですね」、「堀川近躬さんの近所に満州へ行った人が一番多かった」[53]というような声が多かった。堀川に関する村民たちの評価にも、「当時大日向村産組の専務理事をやっていてね。彼がいく気になったから行く人が増えたんですね。（中略）信用があったですヨ。みんななついて後をついて行った訳だ。団長を頼りにしてね」、「あらゆるものに徹し、すべて熱心だった。炭焼きの技術を改良するにも、ただ口だけで言うのではなく、自分でまずやってみてから、皆に教えていった。そういう人ですヨ」、「人をごまかすとか、だますとか、そういう事は絶対にしない人だった」[54]というような褒め言葉が挙げられる。堀川の悪口を語った人は一人もなかった。貧困層を組織化し、「自ら商人資本との交渉の矢面に」立ち、「豪放磊落、率先垂範の性格」と評される堀川は貧困層における英雄的存在であったのである[55]。

移民団の団長として満洲へ行き、満洲大日向村の建設に懸命に取りくむ堀川に対し、困難な村政の問題に携わり、母村の経済更生に努めた「救世主」が、新たに村長となった浅川武麿である。彼は、元々「矢沢むらの素封家、浅川という姓をそのまま屋号みたいにして呼ばれている旧家の長男」[56]であった。早稲田大学の政治科を卒業した後、没落した旧家には戻らず、東京で結婚し就職した。しかし、辞職した前村長と堀川の懇切な誘いを受け、1935年の夏、郷里に帰ることにした。作者は浅川が迷いながらも最後に帰郷を決めた要因について、以下のように描写している。

> 一介の炭焼人夫から身を起し、悪戦苦闘ともかくも鞏固な産業組合を設立することに成功し、専務理事としてまともからの風あたりの矢面に立ってゐる彼の家のむかしの子守、作男の堀川清躬が、おら、もう一遍、昔のやうに、あんたに奉公をして見てぇ！あんたのためになら、おら、この四斗樽の箍が擦り切れるまで働いて見てぇ！昔、おら、あんたの馬になって、抜井川の磧を駈けまわった。もう一遍、おらを、あんたの馬にしておくんな！おら駈ける、この心臓がつぶれるまでおら駈けると、ふるさとの言葉で言ひ迫った時、浅川武麿には決心がついたのである。[57]（下線部筆者）

このような忠誠、素朴さ、熱情に満ちた告白が浅川をいたく感動させたことは想像に難くない。浅川の帰農には、堀川が大きな役割を果たしたと言える。その後、浅川が提議した分村移民計画は堀川などの村幹部たちの支持を得た。浅川は県庁・農林省・拓務省の関係者官吏と頻繁に会合し、経済更生特別助成金の申請、四本柱会議[58]を組織すること、村民の動員・選抜、村の資産者たちとの斡旋、移民した村民の財産処理などの問題の解決に努めた。彼を主力とした村の幹部たちの活躍を通して、徹底的な移民宣伝がなされ、講演会・座談会・映画会等が頻繁に催された。しかも、村政指導部と県庁との関係が緊密なものになり、大日向村の村政が国・県からの強力な指導の下におかれた。以下は当時、座談会「先進分村に聴く」（1939年1月）に出席した浅川の発言である。

> 「（前略）是非一つ計画を大局的にやってみたいと思ひ、県の御牧ヶ原修練農場の西村

先生などに非常に力強い御指導を受け、又先生にわざわざ加藤先生のところへ連れて行って頂いてお話を伺ひ、私共の計画にお力添へを頂き、更に加藤先生を通じて更生協会とか拓務省、関東軍、或は現地の方々にもお目にかゝり、この計画の御支援をお願ひしたのであります。」[59]

この発言からも分かるが、確かに和田が作中に描いたように、浅川は関係官庁及び加藤完治のような農業移民主唱者との連絡、資金の斡旋などを担う役割を果した指導者としての存在である。その一方で、移民団の団長として、渡満視察、移民の動員、団長としての訓練を受け、先遣隊と共に率先して入植地の建設に着手した堀川は主に実践者として分村移民に情熱と努力を傾けた。元の主人と奉公人、母村の更生と子村の建設、母村を守る村長と子村の「新天地」へ赴く開拓団団長、このような浅川と堀川との関係は、ある意味、日本内地と「日本の生命線」と見られた満洲との関係を象徴しているとも考えられる。作品中で作られたこの「分村神話」は単なる村の「再生譚」にとどまらず、村の更生と国家の政策とが結びついた背景に、昔ながらの人間関係、義理人情の「再生」を投影していると言えるだろう。

戦後、様々な大日向村分村移民に関する研究成果で指摘されたように、戦時下の分村移民を実現させる上で、長野県庁・農林省・拓務省などの各種機関の支援、信濃出身の官僚の斡旋、堀川・浅川をはじめとする大日向村更生委員会の幹部たちの積極的な努力が大きな役割を果たした[60]。上述したように、作品中でも、分村の実施にあたり、その気運を醸成するためにあらゆる手段をもってその宣伝に努めた村幹部たちの決意と実践活動は詳しく描かれている。その結果、特に開拓団団長としての堀川清躬の人物像が浮き彫りになっている。上述した座談会「先進分村に聴く」に出席した時、浅川は分村運動中の堀川に関して、「この人の気持が深く村民の心に喰ひ込んで居ったので、堀川さんが行くといふことになると皆の気持が大いに動いて来た。堀川さんがゐなかったら、恐らくこの計画は出来なかったではないかと私は思ひます」[61] と評価していた。前述した戦後の聞き書き調査を考え合わせれば、和田が描いた堀川の人となりは現実の堀川清躬と極めて近い。その描写からは、昭和恐慌下の日本農村の更生に活躍した中堅人物たちの典型的な姿が浮かび上がってくる。

3.2.2　下層女性の姿

村の四本柱会議の指導層以外でも、作品中に登場した普通の農民の姿及び移民に対する心理葛藤に関する描写も注意を引く部分である。まずは、ある哀話――寡婦・武井ふくの娘・すゑの自殺を見てみよう。若いすゑは元々紡績工場の女工であったが、肺結核におかされ、家に戻ることになった。当時、結核は不治の病であったため、満洲への移民を志している恋人と兄の足手まといとならないよう、すゑは恋人の西川義治に遺書を残し、川に身を投げて自殺する。以下にその遺書の一部分を引用する。

お母さんも、わたしさへなければ浅吉兄さんと一緒に、あなたがたと御一緒に、満洲へ行かれるのです。（中略）仲よく皆さんで満洲へ行って下さい。満洲へ行かれれば、お母さんも手をささらのやうにして炭俵編みなんかせずともよくなり、あなたがたも地獄のやうな山へ暗いから暗いまで入ってゐなくともよくなるときいてゐます。若い娘たちに一日中紡績の綿ぼこりを吸はせなくともらくに暮しはたつときいてゐます。あとに思ひを残すことは何もありませんから、皆さんで仲よく満洲へ行って下さい。（中略）できることなら、わたしも骨になって皆さんと御一緒に満洲へ行きたいと思ひます。わたしも連れて行って下さい。ここ

に埋けられたくありません。ひとりではさびしくて、いやです。くるしいのです。では、さやうなら。[62]

このような「せつない感情と思想の表白が全村の人々の血を」[63] わきたたせた。だが、作者が文中で述べたように、人々に激しい衝撃を与えたのは、川に身を投げて自殺したすゑの冷たく、病気で実が取られた後の莢のように軽い死体ではなく、その濡れたふところから見つかった遺書のほうだ。一人の哀れな女工の死よりも、村の分村移民という「大事業」を支持し自殺を選んで自分を犠牲する精神こそ重要であるという認識が窺える。和田が大日向村での取材見聞を記した随筆には、作中の人物造形に関する記述がある。

五十代の母親と、十九くらいの娘とが、火もない炉端で話し合っているのであった。（中略）息子はもう先遣隊として入植している。娘さんは小県の丸子の紡績に行っていたが、先頃帰ってきたのだ。（中略）村での最後の夜を過ごすのだと言う。娘さんの方は希望に燃えて生々とした黒目勝ちの眼を瞠っていたが、土を離れていて色は白く、手も柔かくなっていた。母親は自然薯もやうな山女であったが、故郷は去り難く、溜息ばかりついてゐた。
（前略）小説の中のおすゑとふくはその折の会談から思ひついて創作したのである。モデルといふほどのものではない。
（中略）小説の中のいろいろな人物は、淺川村長、堀川専務、小須田兵庫などの主要人物を除いては、みんなこの母子から思ひついたといふほどの程度で、モデルといふほどのものではない。[64]（下線部筆者）

この説明から分かるように、すゑの話は事実ではなく、フィクションである。この話は村民たちの移民熱情を高める装置として描かれる。その他、高齢者移民の老婆の実話も作品中で同じ役割を果している。89歳の小須田ハルは移民の最高齢者であり、最後に祖先の位牌を携えて満洲へ行った。彼女は「村の宝」と思われ、彼女の移民の意気が全国の壮年者を奮いたたせるに足るものとして描かれている。和田は満洲でこの老婆の家を訪ねたことがある。前述の随筆「槍騎兵　満洲だより」（表1）の中で、その時の情景を以下のように描いている。

（前略）私の好奇心をちゃんと見抜いて、さあ見てくれといってゐるみたいであったからだ。心得たものだなと私ははッと気づき、軽はずみな好奇心を愧ぢた。
（前略）家人はふところからおよそ百枚もあらうかと思はれるほどの名刺をとり出して私に示した。それらは代議士や官吏などなかなかえらい肩書の名刺であった。（中略）視察者の軽はずみな好奇心が、この信州の山の中んの老婆を、とんだものにしてしまったことを私は悲しく思ったのである。[65]（下線部筆者）

89歳の高齢で、満洲の土になるという決心を持って満洲に渡った老婆が、多くの視察者の「軽はずみな好奇心」を満足させる「飾り物」になってしまったと和田は嘆いている。その一方、自身の軽率な好奇心を愧じた作者は、視察の後書いたこの小説で、この老婆を、祖先の位牌を携え永住覚悟で渡満するイメージと結実させ、全国の壮年者に移民を促す「装置」として設定した。しかし、その結果、より多くの「軽はずみな好奇心」を持つ視察者の注目を集めることになった。前述した望月百合子の『大陸に生きる』という随筆集の記述によると、この89歳の老婆は1940年秋頃、つまり渡満してから約2年後に、老衰で亡くなったという。この老婆を全国の壮年者の移民に対する士気を上げる「装置」に設定

した作者は恐らく、老若男女を巻き込んだ分村移民の構造の不条理性を考えたのであろう。彼は作中で小学校教員中沢勇三の口を借り、彼の70歳の母の移民参加に対して、以下のように語っている。

「――うちのお婆さんも丁度さ。丁度七十だよ。それにもうからだも弱いんだ。ほんたうを言ふと、」と、勇三は少し声を落しながら、――ほんたうを言ふと、手足まとひになるし、感心はしないんだけどな、しかし、七十にもなってる年寄が進んで出て行かうといふその気持はさかんなものだ。その気持が、村の女や年寄たちの気持を少しでも動かすなら、意味があると思ふんだ。」[66]

これは恐らく当時の多くの青壮年移民たちの本音だろう。70歳以上の年寄りの移民参加は、労働力としてではなく、その宣伝効果が評価された。この老婆の例からも分かるが、「過剰人口」として永住の覚悟を持って渡満した人々が「棄民」になる可能性がこの分村移民の構造には潜んでいる。

そのほか、分村移民が決まった後の村民たちの微妙な心理に関しても赤裸々に語られている。例えば、有志の青年代表の一人として文中に登場する西川義治の例を見てみよう。彼は分村移民の先遣隊隊員への応募を恩師の中沢勇三に相談し、「君のお母さんがどう思う」と問われ、以下のように答えた。

「これは、言ってはならないことだと思ひまして、誰にも言ひませんけれど、先生にだけは言ひます。おッ母さんたちは、これはうちのおッ母さんだけぢゃありません、みんな内心ではさうなんぢゃねえかと私や思ふんですが、自分たちは、あとに残ることを考へてるんです。……表面は賛成で、行くと言い、はらのなかでは、人に行かせ、自分たちはあとに残ることを考へてるんですよ。」[67]（下線部筆者）

作品中に登場した若者たちは、閉鎖的で辺鄙な山村を逃れ、新天地と宣伝された満洲へ移住することを積極的に支持した。だが、郷土に強い愛着と満洲に大きな不安を持っている親世代の心には、いろいろな「貧乏人のひがんだ根性から」生まれた「ずるい、利己的な」計算[68]がある。「満州へ行かなかった人は、まあ、豊かな人もあったが、何しろ自分の先祖の土地を捨てていくのは嫌だという人もいた。国策だからって進んで行ったのは若い諸君が多かった（後略）」[69]という戦後の聞き書き調査の答えによると、作中のこのような異なる考え方を持っている親子世代に関する描きは確かに当時の満洲農業移民に対する農民の内面の複雑な心境の一面を表している。

このように、作品中では、老若男女にわたる満洲分村移民に対する熱情、憧憬、不安などの様々な態度を持っている村人の群像が造形された。それを通して、最後に元々各自の立場を持っている村民たちは協力して、滅私協同の精神を持って分村移民という村の大事業を完遂させたという「精神や行動の美しさ、壮烈さ」[70]を際立たせるという書き方に、作者の技巧が見える。

3.3　移民の「理想郷」：イメージ化された満洲

3.3.1　「理想的な新天地」としての満洲イメージ

前述した通り、この小説は大日向村の分村移民計画の立案・動員・送出の過程に焦点を当てており、満洲及び満洲における移民の生活については、あまりふれていない。戦時下の和田の発言[71]によると、彼は満洲大日向村のことを後編として書くつもりだったらしいが、この計画は実現されなかった。表1で示されているように、満洲の開拓地における和田の見聞・感想は何篇かの随筆にまとめられ、新聞・雑誌記事あるいは他の作品集に収録される形式で公表され

た。その一方、小説『大日向村』にも随所にイメージ化された満洲が垣間見える。その描写には、作家の満洲の旅の見聞よりも、日清戦争以来の様々な満洲をめぐる言説の影響が大きいと言える。

一例を挙げて説明しよう。小学校教員・中沢勇三の書斎の机に置かれた数冊の満洲の地理や農業や経済に関する書物が、家に来た昔の教え子の西川義治の目を引いた。これらの書物は中沢にとって、彼が満洲の事情を知る一つの媒介である。その後、中沢と義治は由井啓男の渡満について討論した。啓男は元村長・由井啓之進の末子で、義治の小学校時代の友達である。啓男の家は地主で、下川部落でも二番目の資産家である。その一方、義治が父親のない貧乏な小作人の家の長男である。小学校を出ると、義治は生計を維持するため山の中で働き、啓男は野澤の中学校へ進学した。仲の良かった二人であったが、口をきかなくなり、道で出会っても、どちらも顔をそむけてしまうようになった。今回の分村移民計画に応じて、二人共に先遣隊隊員に応募するつもりだ。二人は互いに満洲へ行くことを喜んでいるが、地主と小作人という格差がある。二人が昔通りに仲良くやれるかどうかを心配している義治に対して、中沢は以下のように言う。

> 「だが、それも古い村のことだ。これからはさうでなくなるんだ。満洲の新しい村ではな、そんなことはなくなる。新しい村では、地主も小作人もないんだ。（中略）もう地主もなければ小作人もねえ。みんなして協同して大地に鍬を打込むだけだ。」[72]

ここで、満洲は地主と小作人の区別がなく、皆は平等に協力して大地を開拓する「新天地」という「夢の理想郷」として提示されている。これは実際の開拓経験に裏づけられたものではなく、満洲へ行ったことがない中沢が満洲関連の書物から獲得した満洲イメージだと言っていい。ここから当時、多くの満洲関連出版物、新聞・雑誌記事を通して作られた「新天地」としての満洲イメージの影響が見える。しかも、このような認識が教員、後は満洲大日向村小学校の校長になった中沢から昔の教え子、青年農民の代表者としての西川義治に伝えられたことは、当時の新聞・雑誌記事で報道された大日向村の分村移民教育の盛況[73]が想起させられる。理想的な「新天地」としての満洲イメージが分村移民教育を通して、小学校の生徒たちまで伝えられたのだ。作品中では、先遣隊隊員が想像した沃土万里の満洲も、武井すゑの遺書で憧れの満洲も、先遣隊の青年が満洲から母村に送られた手紙に現れた満洲も、すべて母村の貧困から解放され、新たな希望が発見できる「理想郷」としてのイメージで強調されている。

3.3.2 「心情的故郷」としての満洲イメージ

そのほか、作品中には哀愁と憧憬を絡み合う「心情的故郷」としての満洲イメージも嵌め込まれた。それは、日露戦争で遼陽で死んだ長男を偲んで移民を決意した77歳の井川クメの話を通して表されている。

前述のように、満洲へ視察に行った堀川は満洲で蒐集してきた各移民団の土と農作物を村に持ち帰り、村常会で村人たちに見せた。その時、井川クメは、「順々に廻されて来たその土壌と粟の穂が自分の手に渡ると、長いことそれを握ってゐていつかな次の者に渡さう」[74]としなかった。そして、「専務さんは遼陽へはお出でやしたかい？」と堀川に聞いた。堀川は「遼陽へは行かなかったがな、すぐそばまで行ったよ。遼陽は大きな町でな、いいところだよ」[75]と答えた。現場でこの会話を聞き、35年前の戦争の記憶を持っていた人々は、みな息を呑み、黙って帰った。長男の死後、井川クメは、遼陽の話を口にしない日はなかった。「伜の骨はどんなところに埋けられてゐるのだらうか？どんな山が、どんな川

が、そこには聳え、流れてゐるといふのであらうか？どんな花が咲くところであらうかと、彼女は日毎にそれを言ひ暮らして人々を泣かせた。人々は彼女がその現実の距離を知らずただせつない母親の一途な気持からその土地をまるで恋い慕ふみたいに口にするのを聞いて泣かされたのであった」[76]。だから、井川クメは満洲から持ち帰られた土などをその手で掴み、「遼陽も同じ満洲だよ。地つづきだわさ」[77] という堀川からの返事を聞いた数日後、次男の一家と満洲への移住を決めたのである。満洲は、彼女にとって、異郷とはおもえない「懐旧と愛着の情があった」息子の骨が眠る土地であり、一度は訪れたいと切願していた。

井川一家の移民は堀川が満洲からもたらした実物と実話が村民を動かした一例である。しかも、作者は日露戦争の遼陽会戦で死んだ一人の兵士の話を通して、満洲を日本人兵士の血が流れた土地として認識させ、移民たちにとっての日本と満洲との心理的な距離を縮め、「異郷」としてのイメージを弱めたのである。満洲に関する先行研究においても常に言及されているように、日本は日露戦争によって、「十万の英霊、二十億の国幣」という莫大な犠牲と引き換えに、満洲権益を手に入れた。多くの日本人の心には、「哀れ・郷愁・憧れ」に満ちた「赤い夕陽の満洲」という複雑な「満洲イメージ」が形成された[78]。だから、日露戦争で犠牲した息子を偲んで、彼の血に染まった満洲の土地――「心情的故郷」――へ移民し、その土地を「開拓」しようと決心するというストーリーを通して、日本と満洲との心理的な距離を縮め、感情面から日本人の満洲農業移民を合理化させるという作者の意図がそこに隠されている。その一方、当時の日本人の満洲認識の一側面も窺える。

3.4　文学表象と歴史現実

実名小説として、特に実際に起った出来事を題材とする場合、作品内容が現実と比較されるのは避けられないことである。ある意味で、このような比較はこの種の作品にとって一種の宿命である。『大日向村』では基本的には実際的な大日向村分村移民が進められた時系列に沿って、主に分村移民の背景、分村計画の制定過程、分村移民の障害と動員、先遣隊・本隊派遣などの分村移民の実施という四つの面から、大日向村型の分村移民を描いている。引用された大量の統計データが前章で検証されたように、当時の調査資料に掲載されたデータとほぼ異なりがなかった。作品中の主な村の幹部たちも現実に存在しており、作者も主として現実に基づき、その人物像を造形した。そのほか、分村移民計画の立案過程、分村規程、先遣隊・本隊の送出日程などの細かいところも現実の分村と一致した。これらの点から言えば、この作品はルポルタージュの性格が強い。これは先述した作者の創作動機と関連しているだろう。

したがって、客観的に見て、実地視察・調査を踏まえて創作された小説として、『大日向村』には確かに当時の分村移民のいくつかの方面の実態が描かれている。これもこの小説が戦時下の農民文学代表作として評価される点であることを指摘しておきたい。例えば、前述した村の疲弊した状態に関する冒頭部の描写が挙げられる。その描写には作家の意図を込めて過剰に表現された部分[79] があるものの、昭和恐慌下の日本内地農村、特に、耕地不足で営農基盤が弱い山村は潰滅に瀕していたことは事実であった。この描写は当時の一般山村の共通性を示しているのである。しかも、移民過程における豪族・地主・商業資本と小作農たちとの対立・矛盾[80]、農民の郷土に対する愛着心と見知らぬ満洲に対する不安などの心理的葛藤、移民選抜・先遣隊派遣・負債整理・跡地処分等の問題をめぐる村内の混乱、戦争の遂行に伴う「人口過剰」から労働力不足への転換など、いろいろな「挫折」に関する言及も評価し得る。

しかし、作者が「後記」で述べているように、

この作品は実在の人物、事件と創造された人物、事件を組み合わせて書かれた小説である。彼自身は「忠実な記録者」ではなく、創作者である。前述の武井すゑの話はその一例である。だから、小説の中に、大日向村の分村移民の実状について、語られなかったこと、あるいは言及するだけでその裏の実情に触れなかった事実があるのは容易に想像がつく。以下、前節までの分析をまとめながら、移民先遣隊の中途帰村者や村外からの移民参加、移民構成階層の不均衡、入植地に既墾地が存在していたことなどの問題を挙げ、小説の中に示された表象と現実とのギャップについて見ていく。

県からの経済、政策上の支援があり、村の幹部たちも移民事業に熱意を燃やしたが、分村計画の実施は困難であった。一つの問題は、「先遣隊の人選はその送出を急いだために充分厳密に之をなし得なかった」[81] ことから、先遣隊の中に中途帰村者が出たことである。本来、村民の多くは郷土に対する愛着を持ち、満洲に対する不安を持っていた。中途帰村をした先遣隊員たちから現地の状況や移民の将来に関する話が伝わり、村民の不安は増していった。だが、村の指導者たちも県当局も既に大日向村の分村移民を決めていたため、その後、講演会と集会を通して、入植地の良い地理環境と移民の母村更生・国策遂行上の意義を頻繁に宣伝し、積極的に村民を勧誘した。この先遣隊の中途帰村者の話について、和田は言及していない[82]。

もう一つの問題は移民の既定目標を達成できなかったことだ。前述のように、繭価の回復による村の経済状況の好転、戦争に伴う軍需景気で鉱山採掘が再開したこと、そして徴兵で労働力不足に転換したことなどによって、分村移民の後期には、移民熱が減退し、分村移民規程[83] に基づく移民数の目標値に達しなかった。その解決策として、ほかの村からの移民を吸収し、あるいは移民リストに実は移民しない人の名前が加えられたことがあった。1939年12月時点の191戸の移民の中に、村外からの移民が62戸を占め、その60％は大日向村とまったく無関係だった[84]。この情況は戦後大日向村に関する満洲農業移民への聞き書き調査からも証明できる[85]。

そのほかにも隠された事実がある。それは、実際に移民した村民たちの階層構成のことだ。分村へ移住した者は村の各層から出たのだが、全体としてみると、表2[86] に見るように零細農の割合が高かったことが分かる。

当時の満蒙開拓の専門誌『新満洲』[87] の記事からも大日向村の実情が分かる。1940年10月1日に発行された『新満洲』第4巻第10号には、農村更生協会主事としての早川孝太郎の「分村計画と母村の再建」という文章が掲載されている。その中に、大日向村の分村移民に関して、以下

表 2

村税特別税戸数割徴収額	村内総戸数	左記の内移民戸数
三圓以下	47	31
三圓以上	52	9
五圓以上	75	11
十圓以上	107	2
三十圓以上	27	／
五十圓以上	18	／
百圓以上	13	／
合計	339	53

のような記述がある。

> （前略）当時総戸数四五〇戸の中から一五〇戸を送出し、別に五十戸を二、三男の新戸創設として、都合二百戸を作る筈であった。所が結果は初期計画とは大分異って、実際の移動戸数は小学校の先生を加へても六十数戸であった。之等農家の所有耕地は、田畑に宅地を合せて十五町歩程度で（小作地は一先づ別にして）之が一戸平均は二反四畝程度である。しかも村内の平均面積は略ぼ五反歩であるから如何に移住者の持つ面積が少いかが判る。
> 此事実からも考へられるのは、如何に山間の僻村であっても、僅々二反歩そこそこで生活が成立つ訳はない。之は実際に移動した家の多くが、農耕とは縁の少い製炭業者であった事に依るのである。[88]（下線部筆者）

以上の点から見れば、「あらゆる資産的、頭脳的、または年齢的階層から選び出し、単一の村でひとつの開拓団を編成する」という大日向型単村式分村計画は、現実には、村を縦に真二つに割ることではなかった。移住者は比較的下層の階級から抽出され、また他の村の移住者も混入されたなど、宣伝された「分村神話」と距離があるのは疑う余地が無い。「これはやむを得ないことで、実際問題としても分村の建設に必要な幹部になる者さえ母村から出れば、必ずしも機械的に村を縦断的に区分する必要もないし、その方が却って実現可能性も多い」[89] のだと弁解されているが、これ自体が当時の移民宣伝の虚偽性を反映しているのではないだろうか。しかも、農耕とは縁の薄い製炭業者の移民や直系相続ができない次男・三男が「戸」として移住させられること、移民者の負債と財産との相殺など、分村により、母村の戸当たりの耕地面積の拡大などの目標が最初から実質破綻していたと言えるだろう。

第四は、既墾地の問題である。すなわち、大日向村の移民団が入植した満洲の四家房には未墾地の以外に、広大な既墾農耕地がすでに存在していたことである。この問題に対する和田の態度は戦後、『大日向村』への批判（例えばその国策協力的性格に対する批判）を招く最大の原因になった。まずは、作中のこの問題に関する記述を検討する。

大日向型分村計画は「人員においても団結力においても、国レベルからすれば理想的なものだったのである」[90]。だが、開拓団の全体的な建設力、生産力に不足があるのは疑うべくもなかった。この点については、小説にも描かれている。

> 分郷或ゐは分県式の移民団にあっては、団員は殆んどすべて血気さかりな青壮年層から構成されてゐた。新しく一戸を起す次三男も多く、長男でも三十代の壮年者が多かった。謂はば精鋭をすぐって成ってゐる団であるのに反し、大日向のやうな単村式分村になるとさうはゆかない。八十九歳の小須田ハル、七十歳の中沢駒、同じく七十歳の井川クメなどを擁し、四十代五十代の戸主が少なくないのである。年寄子供の労働力をもたぬ口が何処よりも多いことになるのである。或る意味でそれは全国に誇り得ることがらではあっても、生産を本位に考へるとさうでないのだ。[91]（下線部筆者）

リーダーとして浅川と堀川も当然この実情に悩んでいた。だから、「この苦衷を拓務省や満拓主脳部に訴へ、入植地決定に情状の斟酌を乞ふ」[92] という相談が二人の間で交わされた。そして、二人の努力により、ついに、「昭和十三年一月二十八日、満拓牡丹江支所に於て愈々その入植地が決定した」[93]。決められた入植地は吉林省舒蘭県四家房で、既墾地2600町歩、既墾水田1000町歩、未墾原野350町歩、山林4080町歩がある[94]。しかも、近くには川も駅があり、自動車路、鉄道、

主な都市への汽車便など、交通施設も整備されている地理的条件の良い地区である。こういう拓務省の決定には、大日向村の開拓団の関係者が満洲移住に積極的にとり組んだことを表彰する考慮もあれば、大日向村の分村移民をモデルケースとして宣伝する意図もある。この入植地のニュースについて、大日向村の村人たちの反応はどうであったか。

> 吉林省と言へば北満といふよりは中満である。耕地もよく耕された既墾地で、入植早々作付ができる筈であった。村当局が胸を撫で下したばかりではない。さすがにこの報告は人々の口から口にのぼったが、いづれも歓喜をもってそれは語られた。
> 満洲大日向村が忽然と人々の眼の前に描き出された。人々はもうそれがあるやうな気になったからふしぎであった。雪に閉された人々は、早くも大陸の曠野に同じ名の子村の姿を描きはじめた。[95]（下線部筆者）

その後、小説は、1938年7月8日の第一回の家族招致隊の送出で終わっている。巻末、和田傳は満洲大日向村の建設情況を直接描くことなく、先遣隊の隊員たちが浅川村長に宛てた何通かの手紙を通して、満洲大日向村の様子をうかがわせる手法をとった。その中に自殺した武井すゑの兄・浅吉の一通の手紙がある。そこで現地の既墾地のことが言及されている。

> 他の移住地では入植してから開墾をはじめるといふところが多いと聞いてをりますが、ここではすでに立派な耕地になってゐるのです。しかも水田の如きは延長六里及び四里半にわたる二本の用水路が開かれてをりますし、既墾地とは言ひながら古いものでもまだ僅かに三四年しか経ってゐませんので、今後少くとも十年は無肥料で反当り一石乃至一石五斗くらゐの収穫はあると見られてゐます。[96]（下線部筆者）

以上の引用から分かるように、この既墾地の問題について、和田が注目するのは土地に愛着を持っている日本人農民の「新天地」への憧憬と地理条件がいい入植地に移住できることへの喜びである。しかもこの既墾地の存在を、開拓団の人員構成に対して開拓当局が「考慮周到」の決定をしてくれたことに解釈した。大量の既墾地の存在の背後には、関東軍と拓務省が廉価で強制的に中国現地農民の耕地（家屋も）を買収したこと、あるいは武力で直接に奪ったこと[97]、すなわち、現地住民に大きな被害がもたらされたことには作者の眼が向けられていない。実は、1938年2月15日号の『大日向村報』に入植地の状況が報道されたことがある。戦後の聞き書き調査によると、「入植地が既墾地であるという事を知っていたので、それならやれるんじゃないかと思って移民した」[98]という考えを持っている村人も少なくなかった。言い換えれば、既墾地の存在は村人の移民意欲を引き出す誘因であり、新生活への不安を大いに解消する役割を果たした。

その一方、当時の移民団長堀川清躬は『大日向村第一年度建設情況報告』（長野県更生協会、1939年）[99]の「治安及現住民」の章に以下の言葉を残した。

> 地区内ニハ満鮮人ノ部落二十一アリ、満人約四千、鮮人二千人居住シ、満人ハ畑ニ、鮮人ハ水田ニ各々耕作ニ従事シツ、アリ、然ルニ吾人ガ入植ト共ニ逐次他地方ニ移転ヲ命ゼラレ、二、三年後ニハ其大部分ノ満鮮人ハ当地区ヨリ退去スルノ運命ニアリテ其ノ境遇ニハ一掬ノ涙ナキニシモアラズ（下線部筆者）

この報告から、堀川団長が現地農民に同情を寄せたことが分かる。「土地への愛着」を持っているからこそ、同じ農民である現地農民が土地

および家屋を失う悲しみが理解できたのだと言えるだろう。だが、移民団長の目にも明らかだった事実に対して、農民文学作家の重鎮としての和田は、満洲農業移民を日本内地農村を救済する唯一の道だと考え、日本人小作人の不安と苦難に満ちた生活現実の問題に着目するのみであり、現地農民の苦難にまでその眼差しが及ばなかった。

当然ながら、以上に列挙された事実の中、作家が元々知らなかった情報もあれば移民宣伝のために意識的に取捨選択を行った情報もある。このような文学としての限界は、時代の制約もある一方[100]、作家自身の認識上の限界及びその創作動機にも関わっている。

4. おわりに

農相の動員に積極的に応え、『アサヒグラフ』の記者に要請されて執筆された小説『大日向村』が上梓された時、現実には、農村経済更生のために移民する経済的な必要性は低下していた。実際、一部の地域では既に移民の必要はなくなっていた。この点から言えば、この小説が「「満州」移民熱低下をくい止めるべく書かれた」[101] 国策小説として評価されるのも理解できる。このような創作意図と時代背景のもと、作品では農村の貧窮を救う策としての満洲農業移民が肯定的に扱われている。作家により、村幹部たちの考え方がほぼ政府の政策に順応しているかたちで描かれ、とりわけ、後半部においては経済更生・母村再建のための分村から、戦争遂行と並行した帝国の大陸進出への寄与のために続行される分村という位置づけの変化が繰り返し強調されている。だが、この分村移民論理の転換は当時の農村における経済更生のために移民する必要性がなくなっていたという事実を示している。そして、植民地経営を有効に実行していくための一つの手段であるという農業移民政策に最初から内包されていた政府側の目的を逆証する。そこから作家の意図及び政府側の予想と相違なるものが浮かび上がっていることも読者に多くの示唆を与えるだろう。

さらに言えば、この小説には、恐慌下の農民の生活ぶり、分村の実施に当り政府側の宣伝と介入、村幹部たちの実践活動及び移民者の心理葛藤（移民計画に対する異なる階層、世代の態度）、当時の日本内地での様々な言説により生成された満洲イメージなどが明瞭に描かれている。そこからは昭和恐慌下の日本内地農村の実態及び満洲農業移民政策の現実が垣間見えると思う。この意味から言えば作者が恐慌下の日本農村に寄せた関心は否定できない。満洲農業移民という時代風潮に無批判にのめりこんだ作家・和田傳の姿、及びその作品に登場した村の指導者たちと、「王道楽土」のスローガンが築いた夢を信じて、あるいは疑いと不安を持って色々な目的で渡満した百姓の姿には、その帝国膨張期の日本に生きていた一般的な日本人の満洲・満洲農業移民に対する共通の認識が隠されている。国家によって作られたこの分村移民のモデルには、最初から様々な利害葛藤、理想と現実との矛盾・乖離が錯綜的に内包されていたこともこの小説を通して推察できる。このような観点に立てば、作家・水上勉が「昭和十年代に、文学青年期をすごしたぼくには、聖戦昂揚のための便乗文学が多く、いわゆる地面に眼をすえた人のことばは少なくて、和田さんの『大日向村』などには涙をもよおし、芸術がまだ農民を描く世界に温存されていることに喜びをおぼえた」[102] という感想を残したのも理解できよう。

作家の国策順応の姿にのみ目を向け、この小説を国策宣伝の開拓文学作品として批判しその文学価値を否定するのみではこの作品の歴史的位置を明らかにすることはできない。この小説をルポルタージュ風の農民文学作品として、その国策順応の一側面の以外に、当時の大日向村分村移民計画の立案・宣伝・実施の実態を語っている一面にも注意を向けてよいのではないか。作品の創作背景を辿り、テキストの具体的な分

析を通して、作品中に描かれた満洲分村移民政策の遂行過程及びその時代の流れに巻き込まれた一般農民と作家の姿を探究し、この小説を戦時下の農民文学の一代表作として再評価すべきだというのが本稿の主張である。

注

1）用語の説明：本稿では、「満洲」という表記を使う。引用文内の「満州」はそのまま記載する。以下は、満洲、満洲農業移民、満洲分村移民、在満、渡満、満蒙などの関連用語の括弧を省略する。そのほか、作品原文と引用文献の仮名遣いはそのまま記載するが、漢字は新字体に統一する。

2）ここで言及した「大陸開拓文学」は「1936年から1945年までの間に、満洲の日本人移民村へ見学・視察に行った日本人作家及び在満の日本人作家により創作された、満洲農業移民の諸事情を題材とする作品群」と定義する。

3）満洲分村移民とは、「先づ當該町村に於ける適正規模農家を調査し、その農家の耕地面積を標準とし、それ以下の零細農家の耕地をこの標準面積まで引上げるにいくばくの過剰農家を送出すべきかを算出し、この過剰部分を渡満せしめ、残存農家の経営」を適正化させることとされていた政策である（産業組合中央会編『農村決戦態勢確立運動に就て』産業組合中央会、1943年、35–36頁）。

4）いわゆる「大日向型」とは一村をもって一移民団を形成し、村を縦に割って地主、中農、貧農のすべての階層をあげて一団をつくるという独立的な単村式分村形式である。

5）1939年6月10日再版、7月10日第7版、8月1日第8版、9月10日第9版及び1940年6月25日第12版が重刷された（厚木市文化財協会『和田傳：相模平野に生きた農民文学作家』、厚木市、2000年）。

6）分郷移民とは分村移民に基づき形成した一種の移民形式であり、一郡又は数郡内の数箇村が合同して、各村共年次送出計画を樹て、毎年数箇村を以て二百乃至三百戸の村を構成して行く移民形式である（三浦悦郎編『満洲移住読本』改造社、1939年、97頁）。

7）本章に引用された先行研究以外に、以下のような関連研究成果も挙げられる。板垣直子『事変下の文学』（復刻版）日本図書センター、1992年（初版：第一書房、1941年）；赤星虎次郎「解説」『和田傳全集　第四巻』、家の光協会、1978年；堀井正子「「満州」移民熱低下をくい止めるべく書かれた小説」日本社会文学会編『近代日本と「偽満州国」』、不二出版、1997年；堀井正子「和田伝「大日向村」の屈折」分銅惇作編『近代文学論の現在』、蒼丘書林、1998年；杉林隆「『大日向村』試論」『姫路工業大学環境人間学部研究報告5』（45）–（62）、姫路工業大学、2003年；椋棒哲也「事変下の和田傳：「沃土」「大日向村」とその周辺」『立教大学日本文学』（108）、立教大学、2012年7月；伊藤純郎『満州分村の神話：大日向村は、こう描かれた』信濃毎日新聞社、2018年。

8）安永武人「戦時下の文学〈その七〉」『同志社国文学』（12）、同志社大学国文学会、1977年3月、132頁。

9）畠山次郎『実説大日向村：その歴史と民俗』郷土出版社、1982年、54頁。

10）田中益三「『大日向村』という現象：満州と文学」『日本文學誌要』（38）、法政大学、1987年12月、81頁。

11）安志那『帝国の文学とイデオロギー：満洲移民の国策文学』世織書房、2016年、413頁。

12）南郷型（宮城県遠田郡南郷村）とは逐年若干宛を移民して満洲の現地においては、ある移民村の一構成部落として落付き、別に現地に二百戸乃至三百戸の独立南郷村を作ろうとしない分村形式である（前掲『満洲移住読本』、96頁）。

13）庄内型（山形県庄内地方）は正しく言えば、分村計画に基づき形成した分郷計画と呼ばれるものの一種である。前述したように、庄内地方の数郡内の数箇村が合同して、各村共年次送出計画を樹て、毎年数箇村を以て二百乃至三百戸の村を構成して行く型である（同上、96–97頁）。

14）1936年3月、先駆けとなって分村計画を立案したのは宮城県南郷村であった。その後、長野県大日向村の単村式分村移民、山形県庄内地方の分郷移民が続いて、分村・分郷移民の気運が全国的に高まり、主な集団・集合移民の形式となっていった。この三つの村は分村・分郷移民の先駆け及びモデルとして、広く宣伝された。戦後、「満洲開拓史刊行会」が編纂した『満洲開拓史』（社団法人開拓自興会、1966年）によると、戦時下の分村・分郷開拓団の数は303に達した。文学創作として、福田清人の『日輪兵舎』は茨城県内原に、満蒙開拓青少年義勇軍訓練所たる「日輪兵舎」の建設される事情から、南郷村の分村に取材している。丸山義二の『庄内平野』は庄内

地方の分郷移民を扱っている。

15）和田傳の自伝「わが人生」（厚木市立中央図書館編集『和田傳：生涯と文学』厚木市教育委員会、1988年）と娘・和田梓の『あのころ：父・和田傳のこと』（大坂透発行（非売品）、2012年）によると、第6回の「芥川賞」の審査会で最高点であったのはこの『沃土』だった。だが、新潮社創業40周年の記念事業として創設された新潮社文芸賞の第1回の受賞者が和田傳の『沃土』に内定していたから、第6回の「芥川賞」は火野葦平の『糞尿譚』に授与されたという。

16）前掲「『大日向村』という現象：満州と文学」、82頁。

17）その見聞記――「内原義勇軍訓練所訪問記」は1938年9月20日の『アサヒグラフ』臨時増刊号（東京朝日新聞社）に掲載された。

18）和田傳『大日向村』朝日新聞社、1939年、377頁。本稿に引用される原文はすべて初版『大日向村』（朝日新聞社、1939年）から引用したもので、以下にも「前掲『大日向村』、〇〇頁」の形式で表記する。

19）前掲『大日向村』、379頁。

20）和田傳「有馬農相との懇談に就て」『藁草履』、金星堂、1939年。

21）前掲『和田傳：生涯と文学』、96頁。

22）前掲「有馬農相との懇談に就て」、273–274頁。

23）和田傳「大日向村」『和田傳全集　第四巻』月報、家の光協会、1978年、4頁。

24）前掲『満州分村の神話：大日向村は、こう描かれた』、111頁。

25）和田傳「わが人生」、前掲『和田傳：生涯と文学』、96–97頁。

26）前掲『和田傳：相模平野に生きた農民文学作家』（厚木市、2000年）、朝日新聞記事データベース、国立国会図書館デジタルコレクションを参照して作成した。

27）前掲『大日向村』の「後記」、379–380頁。

28）農林省経済更生部編『新農村の建設：大陸への分村大移動』（東京朝日新聞社、1939年）、池上甲一「「満州」分村移民の論理と背景：長野県大日向村の事例研究」（『村落社会研究』1（2）、日本村落研究学会、1995年）など。

29）前掲『大日向村』、4頁。

30）同上、29頁。

31）同上、29–30頁。

32）同上、5頁。

33）同上、14頁。

34）前掲『帝国の文学とイデオロギー：満洲移民の国策文学』、457頁。

35）長野県更生協会、1938年10月（収録：山田昭次編『近代民衆の記録6　満州移民』新人物往来社、1978年）。

36）歴史教育者協議会大学部満州移民研究会、1972年。

37）満洲農業移民事業が推進される目的に関して、浅田喬二「満洲農業移民政策の立案過程」（満州移民史研究会編『日本帝国主義下の満州移民』龍溪書舎、1976年）、浅田喬二「満州農業移民の富農化・地主化状況」（『駒沢大学経済学論集』8（3）、駒澤大学経済学会、1976年12月）、玉真之介『総力戦体制下の満洲農業移民』（吉川弘文館、2016年）、小林信介『人びとはなぜ満州へ渡ったのか：長野県の社会運動と移民』（世界思想社、2015年）などの研究が挙げられる。

38）米搗（こめつき）とは、玄米（げんまい）を搗いて精白すること。また、その仕事をする人。昔は玄米を臼（うす）に入れ、杵（きね）で搗いて糠（ぬか）を取り除いた（新村出編『広辞苑　第三版』岩波書店、1983年、904頁）。当時、江戸の商家などに雇われ、その業に従事したものの中に、越後・信濃からの出稼ぎ人が多かった。

39）前掲『大日向村』、179頁。

40）小説の中に、物質に恵まれない信濃人は「雑穀で、つまりひどい粗食で暗いから暗いまで働くのでありますから、しぜん、量で補ひをつけなければならぬことになって大飯をくらふのでありますが、そのため胃拡張になりました。（中略）そんなわけで、すでに袋のやうに胃は拡張してをりますので、雑穀でなく、純粋の米の飯を食ふ段になっても、ぺろりと一升も食ってしまふことになるのであります」（184頁）と描かれている。

41）前掲『大日向村』、182頁。

42）同上、185–186頁。

43）同上、332–333頁。

44）前掲『新農村の建設：大陸への分村大移動』、49頁。

45）前掲『大日向村』、192頁。

46）同上、189頁。

47）1937年8月15日に創刊され、大日向村役場から毎月一回発行される。

48）前掲『人びとはなぜ満州へ渡ったのか：長野県の社会運動と移民』、82頁。

49）前掲『帝国の文学とイデオロギー：満洲移民の国策文学』、「『大日向村』という現象：満州と文学」、「「満州」移民熱低下をくい止めるべく書

かれた小説」という先行研究が挙げられる。
50）前掲『人びとはなぜ満州へ渡ったのか：長野県の社会運動と移民』、43頁。
51）前掲『大日向村』、48–49頁。
52）歴史教育者協議会大学部会・満州移民研究会編「大日向村満州移民聞き書き：長野県南佐久郡大日向村（現佐久町）」（1971年12月から1973年8月まで）、前掲『近代民衆の記録6　満州移民』、335–352頁。
53）同上、339頁。
54）同上、338–339頁。
55）前掲「「満州」分村移民の論理と背景：長野県大日向村の事例研究」、27頁。
56）前掲『大日向村』、23頁。
57）同上、76–77頁。
58）分村移民のために、設立された役場、農会、産業組合、学校の役職員を中枢とする会である。
59）前掲『新農村の建設：大陸への分村大移動』、72頁。
60）前掲『人びとはなぜ満州へ渡ったのか：長野県の社会運動と移民』、『満州分村の神話：大日向村は、こう描かれた』、「「満州」分村移民の論理と背景：長野県大日向村の事例研究」などの研究成果を参照した。
61）前掲『新農村の建設：大陸への分村大移動』、73頁。
62）前掲『大日向村』、243–245頁。
63）同上、246頁。
64）和田傳「原作者の語る事実・小説・芝居：大日向村の人々」『アサヒグラフ』（837）、東京朝日新聞社、1939年11月22日、20–21頁。
65）『東京朝日新聞』朝刊、東京朝日新聞社、1938年11月27日、7頁。
66）前掲『大日向村』、204頁。
67）同上、192頁。
68）同上、194–195頁。
69）前掲「大日向村満州移民聞き書き：長野県南佐久郡大日向村（現佐久町）」（1971年12月から1973年8月まで）、339頁。
70）和田傳「普及版後記」『大日向村』（普及版）、朝日新聞社、1941年、378頁。
71）「たゞ大日向村の分村だけを考へてゐたのですが、そのうち向うへ行くことになったので、あっちとこっちと両方併せて書くつもりになったのです。初めはもっと大きなもので、こっちを前篇位なものにして、後篇は向うへ持って行って、大日向村の初めからの建設を正面から書かうと思ったのですけれど、非常に長くなりますから、向うは向うでまた一巻にしてもいい、――といふやうな考にまたなって、結局あんた風な主としてこっちの分村計画といふものの発展を書くことになり、こっちだけを一巻にしたやうなわけです」（「拓士に栄光あれ：建設に驀進する大日向村を語る作家・劇壇人・当事者の座談会」『大陸』・12月特大號、改造社、1939年12月1日）。
72）前掲『大日向村』、208頁。
73）前掲『満州分村の神話：大日向村は、こう描かれた』に具体的な分析がある。
74）前掲『大日向村』、234–235頁。
75）同上、235頁。
76）同上、236–237頁。
77）同上、237頁。
78）劉建輝「満洲幻想の成立とその射程」『アジア遊学』（44）、勉誠出版、2002年10月。
79）例えば、作者は昭和恐慌の影響を強調し、村民の貧困を村税滞納の原因として挙げた。実は、その背景には所謂「大日向村疑獄事件」の影響も大きかった。当時、村の小学校移転・新築問題（児童数の増加で）をめぐり、村民の意見が分かれ、集落間の利害対立も表面化し、村費の不当支出という問題も起った。村費の支出に疑いを持っていたのも村税滞納の一つの原因になった。前掲「「満州」分村移民の論理と背景：長野県大日向村の事例研究」、二松啓紀『移民たちの「満州」：満蒙開拓団の虚と実』（平凡社、2015年）にはこの「大日向村疑獄事件」が詳しく説明されている。
80）例えば、貧農の踏み倒しで、満洲へ移住することを心配する豪族・地主が負債していた貧農の移民を反対し、回し者・貧農工藤三之助を指図し、分村移民の切り消しを画策させることなど。
81）前掲『新農村の建設：大陸への分村大移動』、323頁。
82）先遣隊員の中途帰村者がいるという情報を掲載している『新農村の建設：大陸への分村大移動』の発行が1939年4月で、和田傳の『大日向村』が上梓される前である。
83）「南佐久郡大日向村満洲国分村移民規程」（前掲『新農村の建設：大陸への分村大移動』、311–314頁）の第二条には「分村目標ハ村内農耕地ノ関係上一百五十戸ヲ移殖シ分村戸数二百戸トシ本村収容戸数ヲ二百五十戸、人口凡一千二百五十人以内トス」と記されている。
84）前掲「「満州」分村移民の論理と背景：長野県大日向村の事例研究」、26頁。

85）以下のような証言がある。「二五〇戸（筆者注：当時の移民目標は200戸である。これは証言者の記憶のミスかもしれない。）はどうでも出すということで送り出した。行きたくない人でも勧められて行った人もある。大日向だけじゃ二五〇戸にならないから脇の部落からも入ってもらったが、入った以上はこっちの名前を語って、そして行った。」、「大日向だけじゃ分村にならないということで、脇の部落から行ったもあります。大日向へ家中で来た人もありました。」、「第一回目の本隊として二〇〇戸行かなければならなかったので、架空のものをつくって、例えば農会長の名前（注：三石市松）を名簿にのせたりしましたよ。」（前掲「大日向村満州移民聞き書き：長野県南佐久郡大日向村（現佐久町）」（1971年12月から1973年8月まで）、340頁）。

86）農村更生協会の松田延一、産業組合中央金庫の亀井邦人の調査資料「分村計畫の村を訪ねて：長野縣南佐久郡大日向村」（前掲『新農村の建設：大陸への分村大移動』、333頁）と前掲「大日向分村計画の解説」を参照し、作成した。

87）満洲移住協会の機関誌で、『拓け満蒙』から改題され、後に『開拓』に改題した。

88）『新満洲』4（10）、満洲移住協会、1940年10月1日、16頁。

89）前掲『新農村の建設：大陸への分村大移動』、343頁。

90）前掲「『大日向村』という現象：満州と文学」、79頁。

91）前掲『大日向村』、343–344頁。

92）同上、344頁。

93）同上。

94）前掲『大日向村』の345–346頁の「満洲国大日向村位置並ニ耕地」の件に基づいてまとめた情報である。

95）前掲『大日向村』、347–348頁。

96）同上、357頁。

97）寺林伸明・劉含発・白木沢旭児編『日中両国からみた「満洲開拓」：体験・記憶・証言』（御茶の水書房、2014年）、劉含発「日本人満洲移民用地の獲得と現地中国人の強制移住」（『アジア経済』44（4）、2003年04月）などの関連研究には詳細に検討されている。

98）前掲「「満州」分村移民の論理と背景：長野県大日向村の事例研究」、26頁。

99）前掲『近代民衆の記録6　満州移民』、288–296頁。

100）当時の社会背景に基づき、同時代の人々の目を意識して言えば、満洲農業移民が実施された時期に、土地所有制度の根源的不平等性を解決すべきとか、開拓政策が内包する侵略性に気づいて開拓民送出に反対したような先見の明がある人などほとんどいなかった（加藤聖文「はじめに」『満蒙開拓団：虚妄の「日満一体」』、岩波書店、2017年）。

101）前掲「「満州」移民熱低下をくい止めるべく書かれた小説」。

102）「農民を描いて芸術的感動「和田伝全集」の刊行祝賀会＿点描」『朝日新聞』朝日新聞社、1978年5月4日、7頁。

（この論文は「平成30年度SOKENDAI短期派遣・長期インターンシッププログラム」からの支援を受けて参加した「第16回中国日本文学研究会全国大会及び国際シンポジウム」における口頭発表の内容に基づき作成したものである。）

（2018年12月6日　採択決定）

Bunson Emigration to Manchuria Depicted by Wada Tsutō:

Focusing on Wada's Novel *Ōhinata-mura*

GAO Yanwen

Department of Japanese Studies
School of Cultural and Social Studies
SOKENDAI (The Graduate University for Advanced Studies)

Summary

After the establishment of Japanese writers' societies such as the Peasant Literature Conference Party (founded in November 1938) and the Continental Pioneering Literature Conference Party (founded in February 1939), many members of these groups started visiting Japanese peasants' villages in Manchuria. They reflected various aspects of Japanese emigration to Manchuria in their works. While promoting the emigration campaign and recording the historical circumstances of the era, they contributed to the popularization of the literary genre known as *Tairiku kaitaku bungaku*.

One such representative work is *Ōhinata-mura* (1939), the best-selling documentary novel by Wada Tsutō, a prominent writer of peasant literature. This novel concerns the village-division (*bunson*) of Ōhinata village in Nagano prefecture, which came to be regarded as a showcase as well as a role model for the *bunson* emigration campaign. The author considers the novel to be a significant work for studying issues such as representations of emigration to Manchuria in Japanese literature during the war. Previous studies, however, focused on the aspect of the novel as propaganda for national policy and lack analysis in terms of personal profiles of the characters, the story plots related to propaganda and promotion of the *bunson* emigration campaign, and the representation of Manchuria. This paper attempts to investigate various aspects of *bunson* emigration represented in *Ōhinata-mura* while referring and adopting sociological and historical research results on agricultural emigration to Manchuria.

The first section reviews the influence of the novel on society, points out aspects which have not been covered in previous studies, raises research questions, and states the objectives of this study. The following section examines the background when the novel was written. The author traces how the novel was created while considering Wada's interests in villages during the Great Depression, a request from his friend who worked at the Asahi Shimbun, his close relationship with the Ministry of Agriculture, his involvement in the Peasant Literature Conference Party, and his visits to the two Ōhinata villages in Nagano and Manchuria. The third section analyzes the text in further detail to discuss the real-life and fiction of *bunson* emigration to Manchuria through examination of the four aspects: the ideology of the *bunson* emigration campaign promoted in the novel, characters from different backgrounds and social status, the representation of Manchuria, and a comparison of the literary representation and historical facts.In the last section, the two characteristics of the novel as propaganda of national policy and as a record of national policy, are discussed based on the analysis stated above. The author argues that this novel should be evaluated not only as a work of *Tairiku kaitaku bungaku* to promote national policy, but also as a representative work of peasant literature.

Key words: Wada Tsutō, *Ōhinata-mura, bunson* emigration, Manchuria, literary appearance, national policy, peasant literature